# ジェイン・オースティン『説得』

宮　崎　孝　一

## (1)　名前と実質

この作品の書き出しは次のように始められている。

> サマーセットシャーのケリンチ・ホール（Kellynch hall）のサー・ウォルター・エリオット（Sir Walter Elliot）は，自分一人で楽しむためには，「准男爵名簿」（Baronetage）以外の本は決して手にしない人であった。暇な時間をつぶすためにも，心労の時間を慰めるためにも，これ一冊あれば十分であった（I，i）。

他のページが興味を引かない場合には，自分の一家に関する記載を眺めていれば満ち足りるのであった。

サー・ウォルターが放漫財政の末，借財がかさみ，それから脱け出す方法を考えなくてはならなくなったとき，彼が思いついたのは，一番安易な方法，すなわちケリンチ・ホールを誰かに貸して，自分は他の土地へ移ろうということであった。准男爵として土地・邸を所有している者には，その土地の管理，また，そこに住んでいる村人たちに対する責任があるはずであるが，彼はそのことについては一顧だにせず，海軍将官のクロフト（Croft）が借り手として現れると早速手を打ち，自分の一家はバース（Bath）へ移ってしまう。彼はこの歓楽の町で，准男爵という名をひけらかすことの得意さしか考えていないのである。

この父親のやり口に対して批判的なのは，次女のアン（Anne）であって，一家がケリンチ・ホールを離れる際，村人たちの家に別れの挨拶をして回ったのも彼女であった。また，ケリンチ・ホールの住人が入れ替

わったことに対しては次のような感想を抱く。

> ケリンチに留まる資格のない者が去り，持ち主よりも優れた人の手に邸が移ったのだ（II，i）。

サー・ウォルターの自慢の種は，爵位と並んで自分の美貌ということである。彼の部屋には数え切れぬほどの鏡が備えられていて，彼はそれに映る自分の姿を見て楽しんでいるのである。彼が目の敵のように海軍を貶(けな)すのは，次の二つの根拠に基づいている。

> 「海軍は，第一に，素姓の賤しい者たちを不相応な地位に高めて，本人の父親たちや祖父たちが夢にも思わなかったような名誉を授ける。第二に，男の若さと生気を容赦なく奪ってしまう。船乗りは他のどういう職の者よりも早く老いこむことを，わたしは嫌というほど見てきた」（I，iii）。

サー・ウォルターは，海軍の欠陥と思われるものについて語ることによって，実は自己満足の種を増幅しているのである。

アンは十九歳のとき，ウェントワース海軍大佐（Captain Wentworth）と一旦婚約したが，ラッセル夫人（Lady Russell）の説得によってそれを解消した。ラッセル夫人は，アンの亡母の親友だった人で，アンの母親代りになっていた。教養のある女性ではあったが，家柄に拘泥し，地位や身分を重要視する傾向があった。この点，彼女はサー・ウォルターの枠に属する人だったと言えよう。一方，ウェントワース大佐は，財産が全然なかった。そして，入った金を貯蓄することもしなかった。しかし，やがては金持ちになれるという自信はあり，艦艇を指揮し，欲しい物は何でも手に入る身分になれるものと考えていた。当時の彼の貧しさと，この楽天的な性質が，ラッセル夫人には危険なものと映り，アンに対する忠告へと導いたのであった。このときのアンは，母親代りの人の言うことではあり，また，今それに反くことはウェントワース自身の将来のためにもよくあるまいと考えて，夫人の言葉に従ったのである。結婚に関して親子の意見が違う場合について，オースティンの頃の大多数

の人々が，次のように考えていたとモーラー（Kenneth L. Moler）は言っている。

> 子供は，親の反対する結婚は諦めるべきである。しかし，親を喜ばせるために，自分の嫌な結婚をする必要はない[1)]。

若いアンもこの考えに従ったのであったろう。

さて，サー・ウォルターが悪意をもって指摘したように，海軍の軍人たちは，親から譲られた財産によって生活している者ではなかった。クロフト提督はフランスとの戦争に武功をたてることによって自力で財を築き，地位を高め，紳士の仲間入りをしたのである。同じくウェントワースは，アンと別れた八年後には二万ポンドの財産を持つ身になっている。当時の海戦は，勝利者側にとっては莫大な利益をもたらす事業だったのである。

軍人たちは，その地位，配置によって部下を指揮し，戦闘や警備に従う責任があり，爵位が実質を伴わぬこととは対照的であった。彼らが船を降りて陸に住むようになった場合も，その住居が実質的であることは，海軍の軍人たちと親しくなったアンが訪れたハーヴィル大佐（Harville）の借家の描写からも窺われる。

> 部屋の狭いことにアンは一瞬驚いたが，実際の面積を最大限に利用し，借家備え付けの家具の不備を補い，窓やドアを嵐に備えて堅固なものにしてあるハーヴィル大佐の工夫や装備の様を見ると楽しかった（I，xi）。

部屋にはハーヴィルが訪れた遠隔の各地から持ち帰った珍しい工芸品や記念品が飾られ，彼の職業とそれに伴う労苦を語っていた。サー・ウォルターが自慢の美貌を映して悦に入っていたケリンチの鏡よりも，ハーヴィル大佐の狭い部屋の品々の方が，はるかに生活の実質に根ざしたものであった。

### (2) 弱さと強さ

アンに婚約を解消されたウェントワースは，その後永く，彼女に関し

て次のような思いを抱いている。

> 彼はアン・エリオットを許していなかった。彼女はひどい仕打ちをしたのだ。彼を捨て，失望させたのだ。しかも，そうすることによって自分の性格の弱さを示したのだ。断固たる，自信に満ちた気質の彼としては，これに堪えることができなかった。彼女は，他の人の言うなりになって彼を見捨てたのだ。強引な説得に屈したのだ。弱さと卑屈さの現われだった（I, vii)。

ウェントワースが上のようにアンを見る態度には，それなりの理由があるわけだが，アンの家族は彼女をどう見ていたのであろうか。

> アンには見る人が見ればきっと心を引かれるような精神の優雅さと，性格の温和さが備わっていたが，父親と姉とにとっては，彼女は無きに等しい存在（nobody）であった。彼女の言葉には何の重みもなく，彼女の都合はいつも無視されるのだった——彼女はただのアンに過ぎなかった（I, i)。

サー・ウォルターと，長女エリザベス（Elizabeth）とは，自らが空虚であるが故に，アンの蔵しているものが見えないのである。しかし，弱く，無価値と目されているアンの真の相貌は，小説が展開するにつれて示されてくる。

アンの妹のメアリー（Mary）は既にチャールズ・マスグローヴ（Charles Musgrove）と結婚し，二児の母になっている。このメアリーが健康が勝れないというので，アンは父親と姉とがバースに移る際同行せず，メアリーの手伝いをするために，マスグローブ家の住居アパークロス・コテジ（Uppercross Cottage）に暫く留まることになる。メアリーは父親ゆずりの上流階級意識が旺盛で，家事には全く興味を示さない妻である。この家に，よく気がつく働き者のアンが現れたことは家の雰囲気を一変させ，殊に子供たちは，活動的で温かみのある伯母を大歓迎であった。メアリーの長男チャールズが外で遊んでいて転び，鎖骨を折って家に運び込まれたとき，母親はただ，おろおろするばかりで，なす術を知らなかったが，アンがすべての処置を施し，その後の介抱も申し分な

かった。虚栄の支配するケリンチでは“nobody”に過ぎなかったアンが，アパークロスに移った途端，存在を発揮するようになったのである。

ケリンチの邸に移って来たクロフト提督の夫人は，ウェントワース大佐の姉であった。海を離れて暫く陸上で休息するようになったウェントワースは当然しばしばケリンチを訪れるようになり，ケリンチから三マイルしか離れていないアパークロス・コテジ，また，チャールズ・マスグローヴの親たちや妹たちのいるグレート・ハウスへもよく顔を見せるようになった。したがって彼は，アンとも会う機会が生じるが，初めのうちは固い表情を崩さず，通り一遍の挨拶しかしなかった。アンも敢えて積極的に近づこうとはしなかった。(この二人の間が打ち融ける次第については後に述べることにする。)

チャールズ・マスグローヴにはヘンリエッタ（Henrietta）及びルイーザ（Louisa）という二人の年頃の妹がいる。ウェントワースは，この二人の娘の両方に好感を持ち，親しみを感じるが，どちらかと言えば，ルイーザに対する気持の方が強かった。ルイーザも彼に心を奪われた。

十一月のある日，マスグローヴ家の娘たちや，ウェントワース，アン等で，ウィンスロップ（Winthrop）の方面に散歩に出たことがあった。途中，アンが疲れて路傍で休んでいると，ウェントワースがルイーザに話している声が聞こえて来た。彼はルイーザの決断力や断固とした性格を賞賛した後，頭上のハシバミの実の一つを枝から取って次のように言う。

> 「この美しいつやのあるハシバミは，持って生まれた力を保って，秋のあらゆる嵐に耐えてきたのです。傷もなく，完全な姿で，他のハシバミの多くが枝から落ちて人の足に踏みにじられた中で，これだけはハシバミの持ち得るあらゆる幸福を持ち続けているのです。……私が関心のあるすべての人に対して第一に望みたいのは，堅忍不抜ということです」(I, x)。

ウェントワースは，こう言いながら，かつて彼に対する約束を守らなかったアンの，(彼から見た) 弱さについても思っていたであろう。

さて，前にちょっと触れたが，ウェントワースが，友人ハーヴィル大佐とベンウィック大佐（Benwick）が住んでいるライム（Lyme）の家を，マスグローヴ一家の者たちやアンと共に訪れることになった。

朝，皆で海岸を散歩していてコブ（Cobb，小石や粘土で築いた小山）の頂上まで来たとき，他の者たちはその段々を静かに注意深く降りたが，ルイーザだけは踏み段の上から跳び降りてウェントワースに受け止めてもらうのだと言って聞かなかった。その一回目は成功した。しかし，彼女が二回目を試みようとしたとき，ウェントワースは危険を思って制止したが，彼女は「私は決心しているのです」と言って聞かずに跳び，今度はウェントワースの動作が一瞬遅れたため彼女は硬い石の上に落ちて頭を打って仮死状態となった。ウェントワースは真蒼になって，ルイーザを抱き上げ，メアリーは夫チャールズにつかまって泣き叫び，ヘンリエッタは失神して，アンとベンウィックに支えられた。

> 「僕を助けてくれる人は誰かいないか？」というのが，ウェントワース大佐が絶望的な声で叫んだ最初の言葉だった。体全体の力が失せてしまったようであった。「あそこへ行ってあげて，行ってあげて」とアンが叫んだ，「お願い，行ってあげて。ヘンリエッタは私が支えています。私は大丈夫だから，彼のところへ行ってあげて。ルイーザの手をさすってやって。こめかみをさすってやって。この塩を持って行くのよ」
>
> ベンウィック大佐は言われた通りにし，チャールズも妻の手をほどいてウェントワースのところへ行った。ルイーザは二人によって持ち上げられ，一層しっかりと支えられ，アンの言った通りのあらゆる手当が施された。……ウェントワースは，立ち上がると，壁のところまでよろめいて行って身を支え，苦悶の声で，「ああ神よ！ルイーザのお父さん，お母さんは！」と叫んだ（I，xii）。

すべての者たちが取り乱し，うろたえ，泣き叫ぶ中で，アンだけが一人冷静さを保ち，医者を呼びにやるとか，ルイーザを宿屋に運ぶとかの善後策を講じた。チャールズもウェントワースも，唯々としてアンの指示に従った。

一応の処置がすんだ後で，アンは次のように考える。

ウェントワースさんは，誰でも性格の強い人は幸福で有利だと前に言ったことがあったけれど，それが正しい考えかどうか，今は疑う気持になっているだろうか。精神のあらゆる特性と同じように，それにも矢張り釣合と限界が必要なのだということに，思い当らないだろうか。人の説得に応じやすい性質でも，非常に確固たる性格と同じように，時には幸福に恵まれることもあるのだということに，この人が気づかないはずはあるまい（Ⅰ，xii）。

このアンの黙想には，彼女自身の過去を肯定したいという願いと，ウェントワースの持論への批判とが相並んで含まれている。

コブの事件を契機として，アンとウェントワースとは立場が逆転する観がある。弱いと見られていたアンが非常な強さを秘めていたのであり，ウェントワースは意外にも脆(もろ)い面を示した。また，ウェントワースから堅忍不抜ぶりを褒められたルイーザは，単なる無思慮な意地っ張りに過ぎないことを露呈したことになる。

この後，アパークロスから，アンもウェントワースもバースへ移ることになるが，その頃からウェントワースは何かにつけて，アンに対してぎこちない態度を示すようになる。例えばバースでアンが初めてウェントワースと会ったときの様子は次の如くである。

ウェントワースはアンに話しかけたが，また顔を背けた。彼の態度に感じられるものは当惑だった。冷淡というのでもなく，親しみがあるというのでもない。やはり当惑としか言いようがなかった。

……アンは彼が以前よりも落ち着きがないことをはっきり見て取った。前には，互いに一緒になることが多かったので，見かけだけでも，相当無頓着な平静な態度で話し合えるようになっていたのだが，今の彼には，それができなかった。時が彼を変えたのか，それともルイーザが彼を変えたのであろうか（Ⅱ，vii）。

このようなウェントワースの変化の，その後については，(5)の項で見ることにする。

### (3) 感傷性批判

マスグローヴ老夫妻には海軍に入って若くして死んだ息子がいた。夫妻は，クロフト夫人から彼女の弟のウェントワース大佐が訪ねて来ると初めて聞いたとき，この息子のことを思い出す。ウェントワースが一時，この息子の上官だったことがあったからである。この息子については次のように述べられている。

> この家族の悲しい物語の本当のところは，次のようなことだった。マスグローヴ夫妻には，不幸にして，非常に手のかかる，先の見込のない息子がいた。そして幸運にも，この息子は二十歳に達しないうちに死んだ。彼は頭が悪く，陸上にいてもものになりそうもないので海軍に入れられたのだった。以後，家族の者から顧みられることがなかった。それが相応のことなのであった。また，ほとんど何の消息もなかった。そして，彼が外地で死んだという知らせが二年前にアパークロスに届いたときも，ほとんど誰も悲しむ者はなかった（I, vi）。

この息子はリチャードという名前であったが，ウェントワース大佐の下にいた六ヵ月間に，彼の勧めで二度だけ両親に幼稚な手紙を書いてよこしたことがあった。親たちはその内容にほとんど興味を感じず，印象も受けなかった。それなのに，マスグローヴ夫人が，ウェントワースという名前を聞いて，死んだ息子を思い出したのは，精神に稀(まれ)に起こる閃きの例であった。

リチャードの生涯に関するこの辺りの叙述は極めてドライで，評家の多くがこれには不服の意を漏らしているが，逆に，これこそオースティンの真骨頂だ[2]とする評者もある。P. J. M. スコット（Scott）はその代表的なものであろう[3]。

同様の筆致は次の例にも見られる。マスグローヴ夫人を挟んでアンとウェントワース大佐とがソファに坐っていたとき，マスグローヴ夫人が死んだ息子のことを思って溜め息をついた場面である。

> マスグローヴ夫人は，どっしりとした大きな婦人で，やさしさや感傷

よりは，朗らかさや陽気さを表わすのに一層適するように自然によって作られていた。……生きていた間は誰も顧みなかった息子の運命を思って彼女が大きな太い溜め息をついたとき，ウェントワース大佐が我慢して聞いていたのは，まず天晴(あっぱれ)と言うべきであったろう。

体の大きさと精神の悲しみとは必ずしも釣合うものとは限らない。大きな，かさばった体も，世にも優雅な四肢に劣らず，深い悲嘆にくれる権利があるのである（I，viii）。

出来の悪い子供を厄介払いした感じのマスグローヴ夫人が，彼のかつての上官ウェントワース大佐がいるので殊更に溜め息をついて見せたことを作者は指摘しているのである。"Captain Wentworth should be allowed some credit for the self-command with which he attended to her large fat sighings..." には，マスグローヴ夫人の演技に対する皮肉がこめられている。

次には許婚ファニー・ハーヴィル（Fanny Harville）を失ったベンウィック大佐の悲しみについて見よう。軍艦に乗って海に出ているベンウィックのところへ，すべての仕事を後回しにして海路を急いでファニーの死を知らせに行ったウェントワースは，彼を慰めるために一週間も彼のところに留まらなければならなかったほど，ベンウィックの悲嘆は大きかった[4]。後にハーヴィルの住居でベンウィックに会ったアンは，彼がサー・ウォルター・スコットの清い愛を讃える歌や，ロード・バイロンの情熱溢れる悲愁の描写などに読みふけるのを見，また，震える声でそれを吟じるのを聞いた。しかし，彼の感動には何か人に見せるためのような趣があった。そのためか，ベンウィックの悲しみについてアンは次のような感想を持つ。

「やはり，あの方の心の悲しみは，私の悲しみほどではないと思うわ……あの方の将来が永遠に暗いままなんてことは信じられないもの。あの方は私より若いのだし――年齢はともかくとして，感情は若いのだし――人間としても若いと思うわ。また元気になって，別のどなたかを見つけて幸せになるでしょうよ」（I，xi）。

アンの予言通り，ベンウィックは一時アンの詩情と優しさに引きつけられた後，事故の打撃からの回復期にあったルイーザと親しくなり，やがて婚約する。ベンウィックがファニーを失った傷心のポーズには，マスグローヴ夫人のリチャードの死に対するそれに通ずるものがある。ちなみに，ベンウィックは，かつてファニーに贈ろうとして描いてもらった自分の肖像画を，今度はルイーザに贈ろうとして，その仕事をハーヴィルに頼む。彼は快く引き受けるが，アンに向かって唇を震わせて次のように言う。

「かわいそうなファニー！　あの娘だったらベンウィックをこんなに簡単に忘れることはなかったろうに」(Ⅱ, xi)。

ベンウィックのこの行動は，悲しい愛について語り，歌う彼の心の深さが実はどの程度のものであるかを示すものであろう。

なお，「あの方の心の悲しみは，私の悲しみほどではないと思う」と言うアンの悲しみについては，後に詳しく見ることにしたい。

ここで論じたような感傷的とも呼べるマスグローヴ夫人やベンウィックの心の態度には，オースティンは批判的だったのである。

### (4)　不気味な人物たち

アンがアパークロスの仲間と共に，朝，ライムの海岸を散歩していると，見知らぬ紳士とすれ違う。

アンの目と紳士の目とが会った。彼は非常な賛嘆を込めて彼女を見た。彼女もそれに気づかずにはいなかった。……紳士（物腰は申し分ない紳士であった）が，この上なく彼女に感嘆していることは明らかであった。ウェントワース大佐も直ぐに彼女を振り返ったが，彼もそのことに気づいた様子であった。大佐は一瞬彼女を見たが，その輝く目は次のように言っているようであった，「あの紳士はあなたに心を奪われましたね，――僕でさえ今の瞬間には，昔恋したときのアン・エリオットを見ている気持です」(Ⅰ, xii)。

この紳士が，エリオット家の推定相続人（an heir presumptive）のウィリ

アム・ウォルター・エリオット（William Walter Eliot）であったことは後になって判明する。このエリオット氏が何の用があってライムに現れたのかは語られていない。しかし，アンがバースに移ってから，彼もバースに滞在するようになり，二人が会う機会がしばしば生じる。ウェントワースが直観した通り，エリオット氏はアンに心を引かれ，彼女を我がものにしようと企んでいる模様である。ウェントワースとアンが同席している所に彼が闖入することもあった。

さて，エリオット氏は，ごく若い頃は准男爵などという地位には何の興味もなく，財産こそ第一だと考え，家柄はよくないが金持ちの女性と結婚した。しかし，この女性が死亡した後，財産は既に十分に手に入ったので，改めて地位が欲しくなり，疎縁にしていたサー・ウォルターとその家族とに近づくようになったのであった[5]。初め彼は長女のエリザベスと結婚する考えであったが，前述のように，アンを見てからは，彼女に強く引かれ，バースで人の集まる音楽会・舞踏会その他にはまめに顔を出して彼女との接触を図るようになる。彼の意図を知ったラッセル夫人は，前にアンとウェントワースとの婚約に反対した時と同じ根拠に立って，今度は彼女にエリオットとの結婚を勧めるのであった。

アンも，自分がかつて母親がそうであったようにケリンチの邸に住み，エリオット夫人と呼ばれることは魅力的なものに思われる折もあったが，エリオット氏のことを思うと，その気持も失せるのであった。

> エリオット氏は理性的で，思慮深く，洗練されていた，――しかし，彼は率直でなかった。他の人々の良い所，悪い所を見て，感情が奔出するとか，怒りや喜びで熱くなるとかいうことはなかった。アンにとっては，これは決定的な欠陥であった。彼女が若くして身につけた感じ方は変えられなかった。率直さ，隠しだてのなさ，一途な性格を彼女は何ものよりも大切にした。温かさと熱情とが今も彼女を捉えるのであった。時に不注意な，あるいは，軽率なことを言ったり，表情に出したりする人の誠意の方が，心の落ち着きを決して失わず，絶対に言い間違えたりしない人の誠意よりもずっと頼りになると思われた（II，v）。

このように，アンが体質的にエリオット氏に親しめないという事情に加

えて，アンの心が常にウェントワースに向いていることを思えば，せっかくのエリオット氏の努力も効を奏しないことは自明であろう。

さて，サー・ウォルターの顧問弁護士シェパード（Shepherd）の娘クレイ夫人（Mrs. Clay）は二人の子供のある未亡人であるが，エリザベスと親しく，エリオット一家のバース移転に際しては一緒について行くことになる。彼女の容貌については次のように記されている。

> クレイ夫人はそばかすがあり，出っ歯で，手首が自由に動かなかった。……しかし，彼女は若く，全体として見れば確かに美人で，頭脳明敏で，物腰もきびきびしていて感じがよかった。だから単なる外形の美しさよりは，はるかに危険な魅力があった（I，v）。

彼女は顔の皮膚をきれいにするために，サー・ウォルターに勧められたガウランド・ローション（Gowland's Lotion）を愛用しているが，タナーによれば，これは梅毒の薬である可能性が大きいという[6]。そう言えば，クレイ夫人の手首の不自由というのも，その病気に関係ありそうな気もする。

こういう女性がサー・ウォルターに同行することに，アンは大きな危惧を感じる。

> 父親の性格については，静かに多くを観察してきたし，いやと言うほど豊富な知識も持っていたので，このクレイさんとの親交から，家にとって最も重大な結果が生じることは，可能性があるという程度以上の確かさがあるとアンは感じた（I，v）。

この辺りは，サー・ウォルターとクレイ夫人との間に何事かが起こることを予想させる書き振りであるが，結局何ということもなく，クレイ夫人はサー・ウォルターの傍を去る。このことについてはマドリックが次のように述べている。

> サー・ウォルターは，だまされるために生まれて来たような人であり，クレイ夫人は彼をだますために生まれて来たような女であ

る。それなのに，行楽地で暇な二人を一緒に過ごさせ，お目付け役としてはサー・ウォルターのぼんやりの娘がついているだけなのに，作者はなぜ両人の交渉について一言も語らないのであろうか。結局は（作者が勝手に読者に告げているように）エリオット氏が入り込んで来て彼女をものにするのである[7]。

オースティンが筆を控えた理由として，マドリックは，彼女の倫理的不安の作用——芸術的には健全でも，道徳的に当時の読者にいとわしく思われる情況は省略するか，緩和するかする傾向を——挙げている。そして，彼女の作品にも，誘惑の話は時々出て来るが，それぞれ酌量すべき事情があって，読者を無用に刺激しないようになっていると言っている。

上記のマドリックからの引用文中に見えるクレイ夫人の後日談については作中に次のように述べられている。

いとこのアンが婚約したという知らせは，エリオット氏にとっては全く思いがけない打撃であった。家庭の幸福に関する最上の計画と，婿としての権利が可能にしてくれる監視によって，サー・ウォルターを独身のままにさせて置くという最上の望みとが狂ってしまったのである。しかし，失敗し，失望したとは言え，まだ彼には自分の利益と自分の快楽とのために施し得る術はあった。彼は間もなくバースを離れた。すると，クレイ夫人も間もなくバースを離れ，その後に入った噂によると，彼の庇護の下にロンドンに落ち着いたということであった。して見ると，彼が二道かけていたこと，また，少なくとも，一人の術策に富んだ女性によって，相続人への道を閉ざされるのを防ごうと固く決心していることは明らかであった。

クレイ夫人の恋情は彼女の打算を圧倒し，彼女はこの若い男を思う余り，サー・ウォルターを捉えようとこれ以上画策することは止めたのであった。しかし，彼女には恋情と共に手腕がある。彼の狡猾さと彼女の狡猾さのどちらが最後の勝利を収めるかは今のところ未知数である。彼女がサー・ウォルターの夫人になるのを邪魔した後，彼自身が甘言と愛撫に負けて彼女をサー・ウィリアム夫人とし

て迎える気にならないかどうかは今のところ未知数である（Ⅱ, xii）[8]。

話は変わるが，アンの学校友達で彼女より三歳ほど年上のスミス夫人（Mrs. Smith, nee Hamilton）は夫に死別し，今は貧窮してバースの陋巷に一人住まいしている。ひどいリューマチスに悩まされ，体の自由も利かない状態でいるのを，アンはしばしば見舞って慰めてやる。偶然にもスミス夫人の夫はエリオット氏と非常に親しい友達であった。彼女はアンがエリオットと婚約するだろうという噂を看護婦から聞いて，アンに向かって次のように言う。

「私の――現在の友達とは言えませんけれど――以前の友達について一言賛辞を述べさせて頂戴。あの方以上にあなたにふさわしい結婚相手が何所へ行けば見つかるでしょう。あの方以上に紳士らしい，感じのいい方が何所にいるでしょう。私にエリオットさんを推薦させて下さいな。ウォリス陸軍大佐（Wallis）にお聞きになっても，あの方については良いこと以外何も出て来ないことは確かですわ。しかも，ウォリス大佐以上にあの方をよく知っていらっしゃる方はないのですよ」（Ⅱ, ix）。

このようにエリオット氏を絶賛したスミス夫人が，アンが彼と結婚する意志がないことを知るや否や，打って変わって彼の悪口を言う。

「エリオットさんは人情も良心もない人です。悪だくみに長（た）けていて，用心深く，血も涙もない人です。自分のことしか考えない人です。自分の利益や安楽のためなら，自分の評判が落ちる心配のない限り，どんな残酷なことでも，どんな裏切り行為でも平然とやる人です。……実意のない腹黒い人です」（Ⅱ, ix）。

この後に続けてスミス夫人は，エリオット氏が彼女の人の好い夫を徹底的にだまし，金を絞り取った上，弊履のごとく捨てた話を綿々として語る。彼女のエリオット評の余りの豹変ぶりに，アンが驚きを示すと，スミス夫人は，「あなたがエリオットさんと結婚なさることは確かだと

思ったので，人の御主人の悪口は言えないと同様，エリオットさんの正体について話すことはできなかったのです」と答える。これは，余りに薄弱な弁解と言えよう。友達の幸福を思うなら，スミス夫人はせめてエリオット称賛は慎むべきだったであろう。実は，彼女の本心は，アンとエリオットを結婚させることによって，アンに頼んで亡夫がエリオットから被った損害の幾分でも取り戻してもらおうということにあったのである。

このようなスミス夫人の背信的言辞に対して同情的な見方をする評者もある。ウィルトシャー（John Wiltshire）はその一人である。

> スミス夫人は，予想されるアンとエリオット氏との結婚から得られそうな利益を最大なものにするために，手管，巧妙さ，術策を必要とするのである。エリオットが彼女をひどい目に遭わせ，彼女を裏切り，放置したこと，アンが冷血漢と結婚することになりそうなことなどは問題外なのである。アンに警告を与えることなどは，彼女には許されない贅沢であり，忠告することなどは，経済的に安定している人々の特権なのだ。何にせよ，機会が訪れたら，どんな利益が得られそうかを機敏に計算するのがスミス夫人の仕事なのである。これが貧しい者の，のっぴきならぬ立場なのである[9]。

さて，スミス夫人は，アンに対してエリオット氏の本性を暴露した後は，作中で何の役割も演じていない。わずかに，結末において，アンと結婚したウェントワース大佐の計らいで，スミス夫人の夫が西印度に持っていた財産を取り戻したと記されているのみである。

この章には，エリオット氏，クレイ夫人，それからスミス夫人という，一癖も二癖もありそうな三人について見た。これらの人物たちは，物語に陰影と厚みを添えるのには役立っているであろう。しかし，それぞれが作中で演じている役割が，全体の組織の中に十分溶け込んでいないきらいは否めないであろう。あるいは，死を間近にした作者に，各要素を有機的に結合するための推敲を加える時間の余裕がなかったためかもしれない。

### (5) 恋の成就

冒頭の部分で，サー・ウォルターがシェパード弁護士とクロフト提督に邸を貸す話をしているのを，アンも傍にいて聞いていたが，提督の夫人の兄の話が出て，それが牧師補のウェントワース氏のことだと分かる。アンが八年前に一度婚約して後別れたウェントワース大佐はこの牧師補の弟であることをアンは知っていた。話が一段落ついた後，アンは部屋を出て行く。

> 好きな木立に沿って歩きながら，アンはそっと溜め息をついて言った。「あと二，三ヵ月すると，あの方がこの辺りを歩いているかもしれないわ」（I, iii)。

別れはしたものの，アンはこの八年間，彼のことを思い続けていたのだった。

予定通り，ケリンチ・ホールにはクロフト提督夫妻が移って来て，ウェントワース大佐もほとんどそこに滞在するようになる。ある日，大佐はケリンチ・ホールに近いアパークロス・コテジにちょっと立ち寄る折があり，そこにいたアンと久しぶりに会った。会ったというより，見たという方が適当なくらい，短い時間であった。後でヘンリエッタがアンのことをどう思うかと大佐に尋ねたところ，「あのひとは見違えるほど変わってしまいましたね」という答えだった。このことを伝え聞いたアンは次のように考える。

> 「見違えるほど変わってしまった」アンは黙って，深い屈辱を感じながら，完全にこの言葉を甘受した。その通りに違いない。しかも，彼女は仕返しすることもできないのだった。彼は変わっていないし，変わったとしても，悪い方には変わっていないのだから。……自分の青春の花盛りをだいなしにしてしまった八年の歳月は，彼の容貌の優れた点をいささかも衰えさせることなく，いっそう輝かしい，男らしい，明るい顔立ちに変えたのである（I, vii)。

大佐の評は辛い言葉ではあったが，しかしアンは，これが自分の酔い

を醒ましてくれるだろう，興奮を鎮め，心を落ち着かせ，結果として自分を幸福にしてくれるに違いないと思うようになる。彼女らしい，謙虚で素直な感じ方と言うべきであろう。

話は前後するが，アンはかつてチャールズ・マスグローヴに求婚されたことがあった。彼女の二十二歳の時のことである。ラッセル夫人が，この求婚を受け入れるよう熱心に勧めたが，アンは耳を貸さず，あっさり断わったのであった。(前述した通り，アンがウェントワースを断わったのは十九歳の時のことであった。)

さて，ウェントワースとマスグローヴ家との交際が始まってから，皆で一緒にウィンスロップへ行く途中，ルイーザがこの一件をウェントワースに話してしまう。それを聞いたウェントワースの心に，アンに対する考え方の変化が起こったことは想像に難くない。つまり，アンが周囲の動きに受動的に従う女性ではなくなったことを知ったのである。そして，前述したコブでの事故は，ウェントワースの心の中に起こりかけたアンの見方の変化を更に決定的なものにする作用があったのである。

ちなみにルイーザの言ったことが，ウェントワースにとってどういう影響があったかは，この作品の終りの方で，彼がアンに言う次の言葉に表われている。

> 「僕以上に資格のありそうな男性を，少なくとも一人あなたが断わったということを確かな話として聞きました。『それは僕のためだったのだろうか』と，その後何度も繰り返さずにはいられませんでした」(Ⅱ, xi)。

「アンは弱い卑屈な女だ」というウェントワースの印象は，決していつまでも続いたわけではなかったのである。

但し，彼のアンに対する初めの固い態度を，親しみのあるものに変えるのには時間がかかった。例えば次のようなことがあった。

アパークロス・コテジで，アンが甥のチャールズの看病をしていたとき，チャールズの弟の二歳のウォルターが部屋に入って来て，アンにまつわりつき，アンの背中に乗ったりして，うるさくて仕方なかった。彼女がいくら叱っても言うことを聞かない。しかし，ふと気がつくと幼児

は彼女から引き離されていた。ちょうど居合わせたウェントワース大佐がしてくれたことだった。

> この発見にアンは感動し，口が利けなかった。お礼を言うことさえできなかった。ひどく心が乱れて，チャールズ坊やの上にかがみ込んでいた。彼女を助けにきてくれた親切――黙ったままで引き離してくれたこと――その時の個々の動き――そのすぐ後では子供を相手にわざとらしく騒いで，彼女の感謝の言葉を聞くのを避けようとしていた様子，彼女と話をするのは真っ平だという気持を見せつけようとする感じ――それらは，彼女に，様々な苦しい動揺を与え，不安を引き起こすのだった（I，ix）。

これで分かるように，ウェントワースは，アンに無関心どころではなく，非常に気にかけているのだ。ただ，これまでの行き掛かり上，率直に心の中を相手に示すのは面映いのである。そこで，アンはその解釈に思い悩むことになる。同様のことは次の例にも見られる。

ウィンスロップをマスグローヴ家の人々とアンとがだいぶ長い間散歩し，皆が少々疲れてきたときのことである。クロフト提督夫妻の乗った馬車が通りかかり提督夫妻は，婦人たちの中で特に疲れた方があればお乗せしようと申し出る。このとき，ウェントワース大佐が姉に話し，アンを乗せてもらうことにする。

> 彼は彼女の疲れているのを見てとって，彼女に休息を与えようと決心したのだ。こういうことで明らかになった彼女に対する彼の好意のことを思って，彼女は感動した。今までのすべてのことが，この小さな出来事に結実したように思われた。彼女は彼の心の中が分かった。彼は彼女を許すことはできない――しかし，無感覚ではいられないのだ。……彼は彼女の過去の仕打ちを咎め，不当にもひどく恨んでいるけれど，さすがに彼女の苦しんでいるのを見れば，救いの手を延べずにはいられないのだ（I，x）。

上に見たような，ウェントワースの，直接口には出さぬがアンのことを思っている気持の窺われる場面の積み重ねを通して，二人の心は次第に

近づいていくのである。ただ，何時それが表面に現われるかが問題であり，そのためには適当な情況が必要となる。

アンがまずバースへ移り，続いてクロフト提督夫妻やウェントワースがバースへやって来てからのあらましは既に述べた。ウェントワースとアンとは様々な機会に同席し，会話も交すが，本当に打ち解けたものにはなかなかならない。最初のうちアンが気にかけていたのは，ウェントワースがルイーザと結婚するつもりなのではないかということであった。事実，アパークロスにいた間，二人は相当親しそうにしていたし，その上，コブでの事件で，ルイーザが大きな打撃を受けたのは，ウェントワースに一半の責任があるように考えられないこともなかったからである。ウェントワース自身がそれを感じ，ライムを離れて暫くシロップシャーの兄の家で謹慎していた。

意外にも，ルイーザがベンウィックと婚約したという手紙をメアリーから受け取ったときのアンの反応は次のようなものであった。

> 解放され，自由になったウェントワース大佐がふと頭に浮かんだとき，アンは我にもあらず心臓が高鳴り，頬が紅潮したが，それは残念さからではなかった。彼女はある感情を経験したが，それが一体何なのか突き止めるのは，はばかられた。それは，喜悦，たわけた喜悦に余りにもよく似ていた（Ⅱ, vi）。

この時のアンは，彼女に対するウェントワースの気持に関してはまだ確信はないのだが，やがてウェントワースもルイーザの婚約のことを知るに及んで，彼とアンとは，それぞれの心の赴くままに行動できることになる。前述したように，ウェントワースが，エリオット氏の存在を気にして，アンに対して率直に振舞えない時期もあったが，それもやがて解決する。

マスグローヴ家の人たちが，娘の結婚の準備のことなどもあってバースに出て来て旅館に泊まり，クロフト夫人，ハーヴィル大佐，ウェントワース大佐なども集まって来る。アンが訪ねて行ってみると，部屋の中は大変な賑やかさだったが，ハーヴィル大佐が自分の立っている窓際へ彼女を招く。一方，ウェントワース大佐は近くのテーブルに坐って何か

書いていた。ハーヴィル大佐はアンを相手に，妹のファニーとベンウィック大佐との愛のことを話し始めるが，やがて話はいつか男女の愛に関する一般論へと移って行く。ハーヴィル大佐が男の愛情の強さについて説くと，アンは次のように言う。

「あなたや，あなたと似た気持の男の方たちのお感じになることは，十分分かるつもりですわ。同じ人間なのに，人さまの温かい真実な愛情を軽く見るなんてことが，どうしてできましょう。本当の愛情や貞節は，女だけのものだなどと，仮にも考えるようでしたら，わたしは軽蔑されても仕方ありませんわ。男の方は，家庭を持てば，あらゆる立派なよい行いができるものだと，わたしは信じております。男の方は――こんな申し方をして失礼かもしれませんけど――目標がある限り，外ではどんな重大な任務にも堪え，また，家庭のどんな苦しさも辛抱できるのだと思いますわ。つまり，あなたの愛する女性が，あなたのために生きている限りは，ということです。私たち女性の特権だと申したいのは……愛する人がこの世にいなくなってしまっても，希望がなくなっても，なお，いつまでも愛していけるということです（Ⅱ，xi）。

ウェントワース大佐は，ベンウィック大佐あての手紙を書いているはずだったのであるが，どうやら途中でその仕事は止め，アンがハーヴィル大佐に話している言葉に耳を傾けていたらしい。そして，その言葉の中に彼に対するアンの変わらぬ愛の確証を聞き取ったのであろう。アンとハーヴィルとの話がすみ，ウェントワースは一旦外へ出るが，じきに戻って来て，テーブルのところへ行き，散らかった紙の下から一通の手紙を取り出して，アンの前に置く。そしてまた外へ出て行く。さっきウェントワースの坐っていた椅子に坐って，アンはウェントワースから受け取った彼女に対する深い愛を告げる手紙を読む。

こうして，ウェントワースとアンとは結婚することになるが，オースティンの今までの小説で描かれた結婚と著しく違う点は，ウェントワースには先祖から譲られた家屋敷や土地というものは何もないということである。彼は純粋に叩き上げの人である。そして，彼の住処は海であ

り，アンは船乗りの妻になったのである。この作品の最後は次のように終わっている。

> アンは優しさそのものだった。そしてウェントワース大佐に愛されて，その真価は遺憾なく報いられた。ただ夫が軍人であることだけが，彼女の友人たちに，彼女の優しさがもう少し内輪であればいいのに，と思わせた。そして，将来戦争が起こるかもしれないということだけが，彼女の心の陽射しをかげらせるものだった。（II，xii）。

J. P. ブラウン（Julia Prewitt Brown）は，この結末に影響されたものか，この小説で扱われた結婚について，次のように述べている。

> オースティンの後に続く小説家たちが，その主人公や女主人公たちの結婚――例えば，デイヴィド・コパーフィールド，ドロシア・ブルック，また，イザベル・アーチャーの結婚――に与えることになる特殊な，深刻な懸念と抑圧された希望とについて考えると，『説得』の，あいまいな，秋を思わせる気分は，感傷や病気や迫り来る死から出ているのではなく，来るべき世紀における結婚の運命についての十分な意識から生じているのであることに気づく[10]。

ここで考えなくてはならないのは，ブラウンが挙げている三編の小説の結婚の含む問題と，『説得』の結婚の含む問題とでは，本質的に意味が違うということである。デイヴィドとドーラ，ドロシアとカソーボン，イザベルとオズモンドのそれぞれの結婚は，各人物の備えている精神的属性から懸念や不安が生じているのである。ところが，『説得』においては，ウェントワースが海軍軍人であるという客観的条件が結婚生活に影響を与えているに過ぎない。アンは，「愛する人がこの世にいなくなっても，希望がなくなっても，なお，いつまでも愛していく」と言っているではないか。この小説の時代は，フランスとヨーロッパ諸国が敵対状態にある最中であり，いつまた海戦となってウェントワースも艦上の人となるかも知れない，その生命の安否についても見通しはつかない。しかし，そのような前途を見つめつつ，なお，ウェントワースとアン

が，八年の別離の後に結婚することに，この小説独自の美しさがあるのだと言うべきであろう。

〔注〕

1） Kenneth L. Moler: *Jane Austen's Art of Allusion,* p. 195.

2） Marvin Mudrick: *Jane Austen, Lrony as Defense and Discovery,* p. 211及び Julia Prewitt Brown: *Jane Austen's Novels, Social Change and Literary Form,* pp. 133-4はその例である。

3） P. J. M. Scott: *Jane Austen, a Reassessment,* p. 177.

4） この時のウェントワースの果敢な行動を，後にコブにおける彼の行動の弱々しさと比較しているのが Wiltshire である。cf. John Wiltshire: *Jane Austen and the Body,* p. 171.

5） 一応の理論から言えば，地位を得るためだけなら，エリオット氏は現状を維持していれば，いずれ准男爵になれるはずで，サー・ウォルターの娘と結婚する必要はない。しかし，もし，サー・ウォルターが再婚すれば情況は変わって来るので，その場合に備えてサー・ウォルターの娘と結婚することを考えたのであろう。

6） Tony Tanner: *Jane Austen,* p. 237. この本によれば，Gowland's Lotion というのは当時用いられていた薬の実名であるという。

7） Marvin Mudrick: *op. cit.* p. 215.

8） W. A. Craik は *Jane Austen: The six Novels* p. 188 において，オースティンのこの部分の説明に異議を唱えている。彼によれば，エリオット氏はアンと結婚できないのならば，エリザベスと結婚して准男爵の地位を確保すればよかったのだという。また，彼がクレイ夫人の虜（とりこ）になるという想定は，面白くはあるが，この作品の雰囲気には合わないという。

9） John Wiltshire: *op. cit.* p. 181.

10） Julia Prewitt Brown: *op. cit.* p. 150.